

## ミスター・ダフィの麻痺した身体

— その均衡をめぐる社会的言説とテキストの均衡性 —

上 石 実加子

### 目次

1. はじめに
2. 〈均衡〉を保持する杖のメタファー — 権威・歩行補助・ファッション・魔術性
3. メランコリアなく芸術家 — 「バイル・ビーンズ」は麻薬か、それとも万能薬か
4. テキストの均衡と語りの(不)均衡性 — 読みの二重構造
5. ファルマコンとしてのアルコール — 麻痺と飲酒をめぐるディスコース
6. むすび — 鉄道・神経症・ジャーナリズム

### 1. はじめに

「痛ましい事故」における主人公ジェームズ・ダフィは杖を持っている。彼が「頑丈なハシバミの木製の杖」(stout hazel)を持って「断固とした足取りで」(firmly)歩いているとテキストが説明しているのは、冒頭近くで彼の人物像について説明されたパラグラフにおいてである。「ダブリンの街々と同じ土気色をした」顔、無愛想な口元、油気のない髪の毛をした主人公の容姿の描写は、年功を重ねた彼の人となりを説明している。彼には「自分の肉体に少しの距離を置き」、三人称過去形で、自分について書く奇妙ともいえる「自伝癖」がある。この説明に続き、彼は「乞食に施しを与えることを決してせず、頑丈なハシバミの杖を持って断固とした足取りで歩いて

いた」と記されている。乞食に施しを与えないことと「杖を持っている」こととの、この「いかにも唐突な並置」(高橋和久 219)はいったい何を意味しているのだろうか。施しをしないことと、杖を所持していることとのリンクは、慈善の心のない(あるいは失くした)ミスター・ダフィの冷酷さを表わすものなのだろうか。

テキスト上で、ミスター・ダフィが杖を持っていることがわかる箇所は二箇所ある。上記の人物像が説明された箇所と、11月のある夕方、勤務先からの帰り道に夕食をとり立ち寄った店でミセス・シニコアの死亡記事が掲載された新聞の夕刊を目にした後、彼が店から出て家路に着くまでの道すがら、同じく「頑丈なハシバミの杖」(stout hazel stick)を地面に打ちつけながら足早に歩いていく箇所である。この杖に関しては、テレンス・ブラウンによる註釈が以下のようにある。

A stout hazel: A stick cut from the hazel tree, which was associated in Celtic mythology and tradition with the magical powers of the poet. (Joyce, 283)

このように、ダフィの所持している杖は、ケルトの神話・伝承において、詩人の魔術的な力(不思議な力)と関係のあるハシバミの木から作られた杖である。「美の花を咲かせ、

知恵の実をつける」という、ケルト神話においては「詩人の木」(高松189)と称されるハシバミの杖を、ミスター・ダフィが持っていることの意味は何なのか。彼が持つ杖にわざわざ付けられたこの註釈は、あたかもこの杖に何か象徴的な意味があるかのような感覚を読者に与えている。ダフィは、出歩くときに必ず靴を履くように、杖を身につけていたに違いない。

この小論は、表層的に見たミスター・ダフィの身体の一部を担う「杖」を関心の出発点とし、そこからこれまで様々に議論されてきたダフィのパーソナリティを、彼をとりまく同時代の社会的なディスコースと並置することによって、ダフィ像を確認するとともに、彼の断片性が、一見リアリズムを装ったテキスト構造が孕む断層と呼応関係にあることを考察するものである。

## 2. 〈均衡〉を保持する杖のメタファー — 権威・歩行補助・ファッション・魔術性

『ダブリナーズ』には、杖(stick)を持った登場人物が出てくる短編がいくつかある。「出会い」において主人公が出会うある男は、杖をつきながら歩いてくるとある。彼は年配であるらしい。杖は歩行補助のために持っているのか、それとも目が不自由だからかはさだかではない。「イーヴリン」では、冒頭でヒロインの父親が野原で遊んでいる子どもたちを追い払う道具として、ブラックソーンの杖(brackthorn stick)が用いられている。このイーヴリンの父親は、酒に酔って家族の者たちに暴力をふるい脅しをかける。イーヴリンに家を捨てる決心をさせる大きな引き金となってはいるが、父親が暴力を振るう際に、杖がつねにその道具であったかどうかはテキストでは明らかにされていない。たとえそうでなくとも、父親は老年になってから歩行の

ために使用する目的で杖を所持していたのではないことがわかる。彼の所持していた杖の材質であるブラックソーンは「ケルト伝説では不吉な木」であり「黒魔術や毒気を連想させる」木であるという註釈がついている(高松59)。

また、「鳶の日の委員会室」では、選挙管理人のジャックが、父親の自分に生意気な口をきく19歳の息子のことを、今の自分ももっと若ければ、昔よくしたように息子の背中を杖で打ちつけてやりたい気分だとミスター・オコナーに言っている箇所がある。ここで、ジャックもまた、息子を杖でお仕置きしたのが若い頃であったことから、彼が若い頃から杖を持っていたことが見て取れる。いづれの物語においても、杖は、歩行補助具としてではなく、ある意味で、罰やお仕置きを与える道具として採用されているように見える。「対応」でもそうである。不機嫌になって息子に八つ当たりをしているファリントンは、怒鳴りながら思い切り杖で息子を打ち据える場面がある。

杖は、古代の昔から、神々や王の威厳を表わす象徴として、あるいはその武器として用いられてきた。それ以外に、杖は“walking stick”として、歩行補助具としての意味合いを強くイメージさせもする。杖は、人間が二足歩行の機能を獲得したときから必要になったと考えられる最も簡単な歩行補助具であるといえるだろう。歩行補助具としての杖は、「一本の支柱に一ヶ所の握り部分を取り付け、一端を地面に突いて、立位姿勢保持または歩行機能の獲得あるいは向上の目的で使用する棒状の用具」(松澤7)と定義づけられ、歩くことや立つことの補助をし、歩行が不安定で転倒の危険がある場合にはこれを未然に防ぐ役割を果たし、また旅をするとき、足腰の疲労を軽減するなどの目的で身近に使われている。しかし、杖が主に歩行補助具専用で使用されるようになったのは、近年20世紀に入っ

てからではないかと言われている（松澤9）。

特に西洋における杖の歴史を簡単に振り返ってみるなら、杖は、古代・中世において、君主や僧侶の象徴に不可欠なものであり、11世紀になると、アクセサリーとして用いられるようになってくる。そして17、18世紀の美術・建築様式であったロココ調が隆盛するとともに、細くて高い靴に合わせて杖を持つことが全盛となる時代がくる。16世紀頃から籐杖 (cane) が流行り、17世紀にはフランス紳士の重要なアクセサリーとなっていく。この流行は19世紀まで続いていくことになる。

B.C.1567～1085年頃の古代エジプト王朝の墓（リュマの守門）の彫刻に、ポリオによる右下肢麻痺の人が杖にすがって立っている図が紹介されている（今田43-75）ことを見れば、障害者が杖を持つようになったのは歴史的にみて相当昔に遡ることができる。しかしながら、『ダブリナーズ』にみる登場人物たちの杖の用途は、若干の曖昧さを呈示しながらも、歩行補助専用といえるものは殆どないといってよい。

「痛ましい事故」におけるミスター・ダフィは、なぜ杖を持っているのか。彼が歩行の補助のための杖が必要なほど、足が不自由な様子は無い。しかし、勤務先へは電車で通い、帰りは徒歩で家路に着くという習慣をもつ彼は、ある意味での歩行補助として杖を使用していたと考えられなくもない。あるいはまた、モーツァルトの音楽を好み、オペラやコンサートに行く趣味を持つ彼が、ファッションとして杖を身につけていた可能性は十分考えられるだろう。

アイルランドの伝説では、サケがハシバミの木の実を食べて、もっとも賢い生き物となった言い伝えがあることから、特に知恵の木として知られている（Leach, 486）。ある時、フィン（Fionn MacCumal）を育てたドルイドが、若者フィンにサケを獲って来て料理をするように命じる。このときドルイドは料理

はしても食することを禁じたのだが、フィンは魚を焼いているときに親指を火傷して、思わず指を口に入れてしまうことからインスピレーションの才能が授かることになる。彼の焼いた魚が、ハシバミの実を食べたサケだったからである<sup>(1)</sup>。

伝説におけるハシバミの木をめぐるメタファーと、前述したブラウンによる註釈の「詩人の魔術的力」を象徴する意味と、ミスター・ダフィの杖とのリンクは、〈芸術家〉という記号にあるのかもしれない。ミスター・ダフィの、分裂し「二又に分かれたパーソナリティ」（Tucker, 89）という性格類型上の二面性においては、すでにさまざまな先行研究において議論されてきている。もっとも表層的な意味での彼の二面性は、銀行に勤める出納係としての顔と、未完のまま放置してあるハウプトマンの翻訳草稿にみる翻訳家としての顔、およびその草稿に紫色のインクでト書きを記していたことに垣間見せる、彼の演出家を思わせるような「芸術家」としての顔を併せ持つことに見られるだろう。

彼が杖をつくという状況を的確に想定するものは何もない。しかし言えることは、「銀行員」としての彼と「芸術家」としての彼を中間で支える装身具として、杖は雄弁にその象徴性を語る。杖は、彼の身体的・精神的麻痺による不均衡を支えるものとして存在し、あるいはまた、彼の芸術家としての顔を根底で支えるものとしてのメタファーともなっている。だが、一方で、この杖が、彼のあり方の実体性をきわめて希薄なものにさせる装身具ともなっているのである。

### 3. メランコリアな〈芸術家〉——「バイル・ビーンズ」は麻薬か、それとも万能薬か

— A mediaval doctor would have called him saturnine. (Joyce, 104)

主人公ジェイムズ・ダフィは、「中世の医者なら彼を土星の下に生まれた男と呼んだであろう」ような陰気な性質を持つ男である。人間の体内に存在する四つの体液のひとつである黒胆汁が、人間を憂鬱に落とし入れ、意識を鈍磨させるとする、この古代ギリシアに淵源する考え方は、今日でもなお、暗く陰鬱な気質が「土星的」(saturnine)と言われる所以となっている。この気質は、土星の下に生まれた者の運命であるとされ、現代的な文脈においては、不安や疲労、重い鬱屈からくる心の病から、心の痛みによる一時的な気分の落ち込みにいたるまでを意味する「メランコリア」の概念に置き換えられるだろう。

中世後期ルネサンスにおいては、それが病であれ、体質のひとつであれ、メランコリアが土星と特別な関係性を持ち、土星こそが、メランコリア体質の人間をつかさどる不幸な性格と宿命をもたらす原因であるとされてきた。血液、粘液、黄胆汁とともに、黒胆汁は四体液を構成し、その四体液は大宇宙の四大元素と対応関係にあり、それらは小宇宙たる人間の存在と行動を支配し、配合の割合に応じて個人の気質を決定してきた。それは以下の、中世初期の自然哲学者による記述からも明らかである。

事実、人間の体内には四つの体液があり、それらは四大を表し、季節に応じて盛んになり、人間の成長段階を支配している。血液は春を表し春に盛んになり幼年を支配する。黄胆汁は火を表し夏に盛んになり青春を支配する。黒胆汁は地を表し秋に盛んになり壮年を支配する。粘液は水を表し冬に盛んになり老年を支配する。これらが適量混ざり合うとき、人は活気に満ちる。(クリバンスキー 22) (下線部引用者)

壮年を支配する黒胆汁は、「痛ましい事故」

におけるミスター・ダフィが壮年期にあることと偶然にも一致している。ダフィは、ジョイスの兄スタニスロースが「中年になったときの姿」を想定して造られたキャラクターである (Stanislaus Joyce, 159-160) ことはもはや周知の事実である。「肉体や精神の無秩序を示すものすべてを嫌っていた」というダフィのあり方は、古代・中世からの、道徳、美学、衛生といったあらゆる価値に不可欠とみなされた体内の各器官や物質の完全な均衡を表わす理論的概念に基づいていると読める。クリバンスキーは、このメランコリア体質の人間の中に、実は芸術家が多いという興味深い指摘をしている (123)。

「痛ましい事故」と同様に、壮年期のテキストとして分類される「すこしの雲」には (Litz, 53), 自分の心の内を活字にしたいという思いを抱く、詩人志望のミスター・チャンドラーという 32 歳の男が登場する。「気質はちょうど円熟期にさしかかったばかり」の彼には、韻文で表現したいさまざまな気分や印象があり、テキストでは、彼自身が「果たしてそれが詩人の魂なのか」どうかを摸索していることになっている。そのチャンドラーが自分の「気質の主調音はメランコリーだ」と思う件りがある。詩人という「芸術家」と「メランコリー」気質とのリンクがここにはある。

前節で触れたように、「痛ましい事故」のミスター・ダフィもまた、「芸術家」としての顔を持っている。バーナード・ベンストックは、ミスター・ダフィが外部との一切の関係を持たずに孤独な精神生活を生きるということと、それに比例して、彼が自伝的なテキストを作る習慣を、「痛ましい事故」におけるもう一つのテキストとして位置づけている。「自分の肉体から少し距離をおいて」生きている人物を主人公とし、そのテキストは「パイル・ビーンズ」という題目の私的叙事詩だとまで言っている (Benstock, 558)。真鍮のピンで束ねた紙切れの表紙に、おそらくある新聞か

ら切り取って (Donovan, 36) たまたま添付された「バイル・ビーンズ」の見出しを、ダフィの自叙伝のタイトルと読む (His work is called Bile Beans, a personal epic in epigrams...) この読みは、ジョイス自身がかつて “Epiphanies” と名称をつけたノートを持っていた (Kenner, 106) ことが伏せんとなっているといえる。

「バイル・ビーンズ」とは、胆汁の異常による病いを治療する治療薬のことを言うらしい (Joyce, 282)。胆汁は、肝臓から分泌されて十二指腸に流れる消化作用を助ける体液である。ダフィに消化器系の持病があったかどうかは分からない。ただ、彼は、ミセス・シニコアの死亡記事を目にした後、胃痛を覚える場面がある。神経症による胃痛と判断する方が適切なテキストの文脈からは、もちろんダフィの持病を特定できるものではない。また、彼が紙の束の表紙にバイル・ビーンズの広告の見出しを貼り付けてクリップで留めていたことは、彼がこの薬を常用していたという解釈に直結するものではない。彼の精神的麻痺は器質性疾患とは考えられてこなかったからである。

しかしながら、ユンが指摘するように、ダフィの気質は、彼の胆汁性の病からの影響と結びつき、ダフィのいわば「空虚な精神生活は、彼の身体にコード化された記号によって脱構築されて」 (Yun, 3) いる。身体と精神との親密な相関性を考えるとき、ダフィは精神的麻痺だけから、「ダブリンの街々と同じ土気色」の顔をしているのではないのである。「身体的にも精神的にも体の変調をきたす一切を嫌っていた」ダフィが、身体の〈均衡〉を保つためにバイル・ビーンズを服用していたとするなら、〈芸術家〉として不毛に帰した自己の何がしかを埋め合わせるため、あるいは彼の美意識に基づくものと解するメタフォリカルな読みを誘発させるとともに、結局は何物にも影響されない彼の精神生活そのものが、

実は混乱の危機につねにさらされていたことを裏付けているのである。

19世紀後半から20世紀にかけて、バイル・ビーンズをはじめとして、ザムバック (Zambuk) という軟膏など、現在では処方されないような鎮静剤が多く商品化された。かの第16代大統領エイブラハム・リンカーンが、19世紀には一般的に処方されていた “blue mass” および “blue pill” と呼ばれる薬を一時服用していたことはよく知られている。前者は日本語訳で「青塊」、後者が「青汞丸薬」となるが、別名を “mercury mass” といった。以下に「青汞丸薬」の説明を参照する。

The “blue pill” is actually a round, gray pellet the size of a peppercorn.... It was simple enough to assemble most of the ingredients, which include mercury, liquorice root, rose-water, honey and sugar, and confection of dead rose petals. (Hirschhorn, 324)

主成分を水銀とし、その他はきわめていい加減な成分からできているのがわかる。リンカーンはメランコリーおよび沈鬱症 (hypochondriasis) を患っていたといわれ、これに対して処方されていた薬が「青汞丸薬」であったが、下剤の作用があり、常用すると水銀中毒にかかる可能性のある極めて危険な薬物であったとされる。長い間、水銀は医療に使用されてきたにもかかわらず、水銀中毒に関するバイオロジーが進化してきたのは、ほんのここ2、30年のあいだであるとされる (Hirschhorn, 325)。水銀が有毒物質であることも、昔から常識になっていたにもかかわらず、特に18世紀から19世紀にかけて、水銀がほとんどの病気の治療薬として使用され続けたのは、当時の医療の低迷を表わしていると考えられた。

1902年4月21日付けの *Evening News* 紙

には、バイル・ビーンズを服用した女性の体験談が載っており、慢性的な病いに苦しんでいた彼女は、この薬を服用することで元気に回復し、家事もできるようになって幸せな毎日を過ごしている旨が記されている。短期間で、気分をすっきりさせ、病いをたちどころに治すこうした薬には、「青汞丸薬」にみるような、麻薬作用のある成分が含まれていたと想像できる。

ミスター・ダフィが心がけた精神的・身体的な〈均衡〉の保持は、彼の食事習慣にも表われているという指摘がある (Tucker, 90)。ラガー・ビールは低温発酵で作られ、長期間保存可能である。また彼のクラッカーはクズウコン (arrowroot) という塊根植物からできている乾物で、コーン・ビーフは肉の缶詰である。バイル・ビーンズの広告もまた、ダフィの〈均衡〉保持の性向を特徴づける別の註釈となっているといえるのである。

#### 4. テクストの均衡と語りの(不)均衡性 — 読みの二重構造

文章家としてのジョイスの最大の功績の一つは、三人称による語りに、一人称で語ったものと同様の「親密度」を作り出したことにあると言われる (Riquelme, 126)。「痛ましい事故」のテキストは、ミセス・シニコアの死亡について報道された新聞記事を中心に、その前後に、ダフィがシニコアと出会い別れるまでの経緯と、彼女が死んだ後のダフィの生活が描かれる構成になっている。ミセス・シニコアの死亡事故の前も後も、いつもと変わらぬ日常生活を送るダフィの〈均衡性〉と、テキストの〈均衡性〉は呼応関係にあるように思われる。

この作品の語りを特徴づけているのは「古典的なリアリズム小説の様式」と言われつつも、主人公の外側の「神の位置にいる中立の観察者／語り手によって、標準的なリアリ

ムの文法に従って書かれているわけではない」(高橋和久 213) というパラドックスがある。その要因として、語り手がミスター・ダフィの声をそのまま報告している部分と、語り手自身の視点から説明する部分があるという、語り手の声に二つの声が入り交じっていること(高橋渡 50)、つまりは、語り手が主人公について語るレベルが、しばしば主人公を客観的に見つめるレベルから、語り手が主人公に寄り添って語るレベルにシフトすることによって視点が複雑化していることにある。また、こうした語り手の声、主人公の声に加えて、主人公の非人称の声、新聞記事の記者の声といった複層的な語り<sup>(3)</sup>の声が、語りの中立性を揺るがしているのかもしれない。さらに、ダフィが、作者ジョイスの兄のみならず、自身の伝記的事実を引きずった人物像を反映しているため、語り手の中立点が曖昧になっていると見られる。以下は、ダフィがコンサートでシニコア母娘と出会うときの描写である。

When he [Mr. Duffy] learned that the young girl beside ① her was her daughter he judged ② her to be a year or so younger than himself. Her face, which must have been handsome, had remained intelligent. It was an oval face with strongly marked features. The eyes were very dark blue and steady. Their gaze began with a defiant note, but was confused by what seemed a deliberate swoon of the pupil into the iris, revealing for an instant a temperament of great sensibility. The pupil reasserted itself quickly, this half-disclosed nature fell again under the reign of prudence, and her astrakhan jacket, moulding a bosom of a certain fulness, struck the note of defi-

ance more definitely.

He met ③ her again a few weeks afterwards at a concert in Earlsfort Terrace and seized the moments when her daughter's attention was diverted to become intimate. (Joyce, 105-6)

ミスター・ダフィは、①の「彼女」の側にいる若い女性が、「彼女」の娘であることがわかると、ダフィは「彼女」が自分よりも1, 2歳年下だと判断するにいたる。よって①も②もミセス・シニコウの代名詞となっている、そう読まれるべきであった。③がミセス・シニコウの代名詞であることが決定的になることによって、読者は、ダフィが娘ではなく母親の方に興味を示したことを知るからである。

しかしながら、「彼女」は、夫からはもはや性的魅力をもつ対象として認識されなくなった孤独な女性であるにもかかわらず、この一連の描写は、知的で魅惑的な、身体的官能性を覗かせる彼女の二面性を描き出しているかのようである。ダフィが結局、彼女の性的魅力を関心の外に置いていることを考えれば、この二面性を描いた視点は語り手の視点と考えられることになる。また、ミセス・シニコウの夫が、長年の結婚生活を経てもはや妻を性的対象として意識しなくなっていたとしても、当時のシニコウが39歳という、熟女というにしては若い年齢であったことを考えるに、果たして夫が、妻と1, 2歳しか年齢差のない男を、娘の方に感心があると勘違いして自宅に歓迎するだろうか。ダフィとの関係性において、ミセス・シニコウは、知的な部分を残しつつ、そこには挑戦的で魅惑的な部分など全くない、むしろ「暖かい土」で優しくダフィという「外来植物」を包み込む、母のような存在となっている。これは、ダフィの自意識として語り手がダフィに寄り添って語っていることになるが、そう考えるなら、

そう考えても、②の「彼女」を、直前の名詞を指し示す、「彼女の娘」を指す代名詞としてとらえ、ダフィはこの「娘」よりも1, 2歳年上であって、彼は母のような人と交際を始めたのだとするのは些か乱暴に過ぎる読み方だろうか。

ミスター・ダフィが三人称過去形で自己について短い文章を書くという自伝癖は、彼が客観的に自分を見つめて書くという、テキストの語り手とある意味で同一のレベルに存在しえる可能性を示唆している。よって、ダフィが三人称過去形で書く自伝が、語り手自身の自伝であると解釈できてしまう。「痛ましい事故」(“A Painful Case”)は「痛ましい患者」であり、その指示対象はミセス・シニコウであると同時にミスター・ダフィでもあり(Tindall, 32), それを自伝的に書く語り手にとっての「痛ましい事件」といえるのである。ダフィの描写の視点が複層的であることが、語り手の全能の位置をぶれさせ、読みの二重構造を生み出しているのである。

ミセス・シニコウと夫との結婚生活が22年間であったことから、43歳で亡くなった彼女は21歳で結婚していると推定される。娘メアリは彼らが結婚してすぐ誕生したとしても20代前半となる。生前の母親との年齢差によるダフィの推定年齢は41, 2歳、娘との年齢差からは20代半ばということになるだろう。だが、こうした年齢の推測が物語の展開に直接的な影響もなければ、内容に何ら別の解釈を付加することもない。ミスター・ダフィは中年でも若者でも、もはやどちらでもいいのかもしれない。ただ、「若者」という概念が自由自在に伸縮する(高松401)ジョイスの意図的な操作に、このテキストも少なからぬ関係があるといえないだろうか。

## 5. ファルマコンとしてのアルコール — 麻痺と飲酒をめぐるディスコース

『ダブリナーズ』は、ダブリンという「麻痺の中心」をめぐる精神史の一章となることを、作者によって意図された作品集である。例えば、「姉妹」におけるフリン神父の死体、「死者たち」では教会墓地の雪の下に埋められたマイケル・フェアリーの遺体、というような不活発の身体が、彼らの生前の精神的麻痺をいっそう強調しているかのように、当時アイルランドの人々が置かれた複雑な歴史的背景を浮かびあがらせる。麻痺は「ダブリンの生活に見られるあらゆることに浸透している病い」(Brandabur, 22)として、「痛ましい事故」のミセス・シニコアの鉄道事故による動かぬ身体にもある。もちろん、「ジョイスのダブリナーズの典型」(Levin, 14)的人物たる主人公ミスター・ダフィもまた、精神的麻痺に冒されたひとりであることには違いない。

『ダブリナーズ』において、麻痺の主たる象徴としての機能を果たしているのは、「酒に酔った身体」であるとジーン・ケインは指摘する(Kane, 192)。ミセス・シニコアは、ダフィとの恋の破綻の後、4年後に列車事故により死亡した。その新聞報道によるなら、彼女の夫と娘が、2年ほど前から彼女が酒に溺れるようになり、夜中によく酒を買いに出ることがあったと証言している。さらに娘は、彼女に禁酒同盟への加入を促していたことから察するに、ミセス・シニコアは死ぬ2年前から常習的な飲酒家と化していたと想像できる。彼女の死因は、ダフィとの失恋がもとになっているとテキストから容易に推測はできるものの、その究極の原因は明らかにはされず、新聞記事での医師による見解では、死因が「ショックと心臓麻痺」とされている。こうしたシニコアの、恋の痛手による精神的麻痺と、心臓麻痺という器質性の疾患が交差する地点を、当時の飲酒をめぐるディスコース

から考えてみたい。

歴史的に飲酒は、病気と結びついた放蕩の原因および結果として、一般的にいう精神障害者の麻痺と関連づけられてきた。麻痺の顕著な徴候は、「精神の破綻と倒錯」であり(Shawalter, 111)、麻痺は19世紀後半に〈病気〉として定着するに至る。西欧において、病理学的にいう常習的飲酒(habitual drinking)の概念は、18世紀後半になってはじめて、ゆっくりと、しかし曖昧な形で浸透していくようになった。著名なアメリカの禁酒支持者であったベンジャミン・ラッシュ(Benjamin Rush, 1745-1814)は、1784年にその著書*An Inquiry into the Effect of Ardent Spirits*において、持続的な酒浸りを、精神的に「憎むべき病気」として特徴づけた。

ラッシュは飲酒の心理的影響に特に注目したとされるが、英国で影響力のあったトマス・トロッター博士(Dr. Thomas Trotter, 1761-1832)は、酒浸りが身体の健康の均衡をくずす病気であると位置づけて、常習的飲酒の器質的影響に注目した。二人の功績は、持続的なアルコールの消費と身体の弊害とを結びつけ、常習的飲酒を病理として、飲酒家を医学的治療を要する病人として分類することに寄与したとされる(Sournia, 29-30)。

スピリッツをはじめとするアルコール度の強い酒は、まず、人間の精神に対して破壊的影響を及ぼすものとして認識された。酒は、人間から記憶を奪い、理解力を鈍らせる。よってさまざまな犯罪行為や殺人行為をも生み出しかねないものとなる。悪霊のごとく、魂の中に悪習や反道徳的行為を持ち込む。このように、飲酒は病いの徴候でも原因でもあり、悪習や墮落行為の原因として認識されていた。

1849年、スウェーデン人の医師マグヌス・フス(Magnus Huss, 1807-1890)が、*Alcoholismus chronicus, eller chronisk alkoholsjukdom* という著書を著わし、1852年にはド

イツ語に翻訳されて、その後ヨーロッパの医学に深い影響を及ぼしていくことになった。このころ、人体に対するアルコールの影響についての知識は、西欧諸国においては体系化されていなかったが、フスによって「アルコール中毒」(alcoholism)という言葉が作り出されることによって、分散していた知識がまとめられ、スピリッツの過度の飲酒によって引き起こされる臓器のダメージの分類法が整備されていった。常習的飲酒が、単なる精神的墮落としてでなく、むしろ一つの病気として理解する考えが導入されていったのである。

このように19世紀は、酒に溺れるという悪習が、アルコール中毒症という器質性疾患として再定義されていく時代であり、中産階級による改革の動きから、飲酒家および飲酒の習慣を取り締まることに強い関心が払われることとなった。西欧各地では禁酒運動が盛んになり、多くの禁酒連盟が生み出された。19世紀中ごろには、各地の禁酒グループがのきなみ合併を始める。1859年に英国国教会節酒協会が設立され、続いてカトリックの節酒協会も設立された。1876年以降、英国婦人会が全面的禁酒のために熱心な宣伝を行ない、飲酒家のための〈更正〉施設を創設するための運動をさかんに展開した(Sournia, 225)。しかしながら、過度の飲酒は概してみうけられた。飲酒は、お祝い事や祭事、伝統行事など、人々の集うところに必ずといってよいほどついでまわり、民間に深く浸透していた習慣であったことは言うまでもないからである。

また、19世紀を通じてのコレラが蔓延し、1890年代には再びペストが現われ、至るところでチフスや結核が流行し、ジフテリアが子供の命を奪っていくなかで、西欧諸国では、こうした病気をめぐって大きな公衆衛生運動が起こってきたが、アルコール中毒の場合、有効性のあるワクチンがあるわけでも、原因となる微生物があるわけでもなかったことに加え、医学的に確たる根拠なしに、蒸留酒が

危険視され、食品とみなされていたワインや、ビール、リンゴ酒などの醸造酒が「健康的」とみなされたことも手伝って、アルコール中毒は、病気か悪徳かの判断が明確になされなかった背景がある。医師たちは、アルコールに依存する不幸な者たちを、社会の責任にすることもできず、ただ彼らを道徳的に非難するほうへと逃避したのである。

『ダブリナーズ』は、「飲酒によって引き起こされる社会的ダメージへの鋭い認識を明らかにしている」と指摘される(Fairhall, 99)。しかし「痛ましい事故」の場合、ミセス・シニコーがアルコール中毒症を患っていたという確証はどこにもない。ただ言えることは、彼女が常習的飲酒者であったらしいことだけである。彼女の決定的な死因は最後まで謎に包まれているのだが、彼女の死ぬ二年前からの飲酒は、彼女にとって時には精神的不安を取り除く万能薬さながらの役割を果たし、また時には、病気や無力感を引き起こす毒薬となったにも違いない。

ミスター・ダフィもまた、昼食にはラガー・ビールをいわば常習的に飲んでいたといえる。ミセス・シニコーの死亡記事を目にして、一時不安な気分が襲われた彼が、パブに立ち寄り、熱いパンチを注文するが、彼の飲酒は、どうやら「適切な」範囲内での飲酒として、シニコーのそれとは一線を画している。彼女の死は、ダフィの犠牲となった哀れな女の姿を映しているばかりでなく、「墮落した」とダフィに言わしめるほど、彼女の肉体的精神的麻痺は飲酒と結びついていることを物語っているのである。ジョイスは、常習的飲酒を扱うことで、「精神的病いを具体的に説明し、肉体的病いを道徳的に説明し」(Kane, 192)てもいるのである。

## 6. むすび — 鉄道・神経症・ジャーナリズム

「痛ましい事故」というテキストにおいて優勢を占めるナラティブは、ミセス・シニコアの死を報道する新聞記事である (Benstock, 559) といえる。この新聞記事を読み終えた後、ミスター・ダフィは新聞から目を離す。「何という結末だ!」 (“What an end!”) という語り手の、ダフィに寄り添って語るサイコ・ナレーション<sup>(4)</sup>は、シニコアの死の結末を嘆く語り手の声と、そのことよりも記事の文体に反応するダフィの声から成り立っている。以前、シニコアから「自分の考えを書く」ことを提案されたダフィは、嘲笑的な反応を見せていた。彼は「空虚な美文書き」と比べられ、「鈍感な中産階級の批評を甘んじて受ける」ことに嫌悪感を示し、彼女の死について語った〈ナラティブ〉に不快を感じているのである。“A Painful Case” を含めた陳腐なフレーズに彼が嫌悪感を示していること、これが「最高に芸術的反応」(supremely aesthetic response) であるとドノヴァンは指摘する (Donovan, 43)。これは、ジャーナリズムに対するダフィの反応の仕方を、ジョイスのそれと同一視する見方からきている。

ミセス・シニコアの列車事故とその新聞報道は、19世紀後半、鉄道とジャーナリズムがさまざまな面で相互に関連していく流れの中にある。1880年代、90年代の英国におけるジャーナリズム界を革命的に進展させた鉄道は、電信と同様にして、必要不可欠なものであった。全国規模に新聞読者を拡大させるためにも、あるいは迅速な情報収集のためにも、鉄道が果たす役割は大きかった。しかし一方で、鉄道は「人間を旅人から生きる小包に変えてしまった」(Ruskin, 111) とラスキンが嘆いたように、列車は、旅人の知覚を「機械化」し、乗客を不連続な感覚に慣れさせて、視覚的・身体的ショックを娯楽にして

(Schivelbusch, 59) しまった。このような現象から、列車旅行や鉄道事故が、トラウマ的な新しいタイプの神経症の原因と同定化されるに至った。当時、鉄道とその事故の新聞報道は、人びとの関心をさまざまに掻き立てたのである<sup>(5)</sup>。

メランコリア体質の「芸術家」としての顔をもつミスター・ダフィの奇妙な自伝癖と、「適切な」範囲内での飲酒は、ある意味で彼の〈均衡〉を保つための「杖」としてとらえることができる。そして、人間の身体的精神的病いがアルコール中毒症とともに鉄道とジャーナリズムの言説の中に描き出されたミセス・シニコアの「痛ましい事故」(A Painful Case) は、ダフィの精神的不均衡を一瞬にして「均衡化」していく奇妙な「杖」ともいえる。そしてこのような身体(精神)の麻痺をわずらった「痛ましい患者」(A Painful Case) であるダフィを描いたもうひとつの「痛ましい事故」もまた、ダフィに寄り添って語る語り手の不均衡をなんとか「均衡化」させる「杖」であるにちがいない。

### 〔註〕

- (1) ハシバミの細枝 twig (占い棒) や叉木は、最も一般的に普及した占い棒 (divining rod: 水脈・鉱脈探知に用いた占い棒) である。17世紀までは、ハシバミの杖は盗賊や殺人犯を見つけたり、また同時に、水脈や財宝を見つけたりするために使われた。ウェールズでは、かぶると願い事のかなうおとぎ話で知られる wishing cap という帽子には、ハシバミの小枝が織り込まれていたとされる (Leach 486)。その他のハシバミに関する迷信については Vickery, Roy. *A Dictionary of Plant-Lore*. Oxford University Press, 1995. を参照のこと。
- (2) 当時、慢性的な軽い病気の治療薬としてバイル・ビーンズは新聞や雑誌の紙面を賑わしていた。しかしこれらのなかには、バイル・ビーンズが病気の治療薬というよりも、明らかに下剤作用のある女性向けのダイエット飲料として服用されていたことがわかるものもあっ

- た。
- (3) パリンダーは、ダフィが結局、私的言語と公的言語との乖離により、自分の感情を他者と共有できる言語を持たなかったと指摘している (Parrinder, 265)。
- (4) リクエルムは、「イーヴリン」における語り、三人称で語られつつも、イーヴリン自身による一人称の語りのような錯覚を与えていると指摘しており、それは、物語が“psyco-narration”から成っているからだとしている。本論の文脈にもあてはまると考えられる。
- (5) 当時、事故や自殺の捏造報道を扱ったヴィクトリア小説として、Mrs. Henry Wood の *East Lynne* (1861); Hervert Cadet の *Adventures of a Journalist* (1900); Robert Louis Stevenson の *The Wrong Box* (1889); Henry James の“The Death of the Lion” (1894); Alphonse Courlander の *Mightier Than the Sword* (1912) が挙げられている (Donovan 34-5)。

[引用文献]

- Benstock, Bernard. “Narrative Strategies: Tellers in the *Dubliners* Tales.” *Journal of Modern Literature*. Volume XV. Number 4. (Spring, 1989): 541-559.
- Brandabur, Edward. *A scrupulous meanness: A Study of Joyce's Early Work*. Urbana: University of Illinois Press, 1971.
- Donovan, Stephen. “Dead Men's News: Joyce's “A Painful Case” and the Modern Press.” *Journal of Modern Literature*. Volume 24, Number 1, Fall 2000: 25-45.
- Fairhall, James. *James Joyce and the Question of History*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Hirschhorn, Norbert., Robert G. Feldman, and Ian A. Greaves. “Abraham Lincoln's Blue Pills: Did our 16<sup>th</sup> President Suffer from Mercury Poisoning?” *Perspectives in Biology and Medicine*. Volume 44. Number 3 (2001): 315-332.
- Joyce, James. *Dubliners*. Notes by Terence Brown, Penguin Books, 2000.
- Joyce, Stanislaus. *My Brother's Keeper: James Joyce's Early Years*. Ed. Richard Elmann. New York: Viking, 1958.
- Kane, Jean. “Imperial Pathologies: Medical Discourse and Drink in *Dubliners*’ “Grace”.” *Literature and Medicine*. Volume 14. Number 2 (1995): 191-209.
- Kenner, Hugh. “The Cubist *Portrait*.” Ed. Bernard Benstock. *Critical Essays on James Joyce*. Boston: G. K. Hall & Co., 1985: 101-111.
- Leach, Maria. Ed. 1817. *Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore Mythology and Legend*. San Francisco: Harper & Row, 1984.
- Levin Harry. *The Essential James Joyce*. London: Jonathan Cape, 1952.
- Litz, A. Walton. *James Joyce*. New York: Twayne Publishers, Inc., 1966.
- Parrinder Patrick. “Dubliners.” Ed. Harold Bloom. *James Joyce: Modern Critical Views*. New York: Chelsea House Publishers, 1986: 245-73.
- Riquelme, John Paul. “Metaphors of the Narration/Metaphors in the Narration: “Eveline”.” Ed. Harold Bloom. *James Joyce's Dubliners*. New York: Chelsea House Publishers, 1988: 73-88.
- “Stephen Hero, *Dubliners*, and *A Portrait of the Artist as a Young Man*: styles of realism and fantasy.” Ed. Derek Attridge. *The Cambridge Companion to James Joyce*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994: 103-30.
- Ruskin, John. *The Seven Lamps of Architecture*. London: Smith Elder, 1849.
- Schivelbusch, Wolfgang. *The Railway Journey: The Industrialization of Time and Space in the 19<sup>th</sup> Century*. University of California Press, 1986. ヴォルフガング・シベルブシュ『鉄道旅行の歴史：十九世紀における空間と時間の工業化』加藤二郎訳，法政大学出版局，1982年。
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Woman, Madness, and English Culture, 1830-1980*. New York: Pantheon Books, 1985. エレイン・ショーウォーター『心を病む女たち — 狂気と英国文化』山田晴子・蘭田美和子訳，朝日出版社，1990年。
- Sournia, Jean-Charles. *A History of Alcoholism*. Trans. Nick Hindley and Gareth Stanton, with an introduction by Roy Porter. Oxford: Basil Blackwell, 1990. ジャン＝シャルル・スールニア『アルコール中毒の歴史』本多文

- 彦監訳／星野徹・江島宏隆訳，法政大学出版局，1996年。
- Tindall, William York. *A Reader's Guide to James Joyce*. New York: Farrar, Straus & Cudahy, 1959.
- Tucker, Lindsey. "Duffy's Last Supper: Food, Language, and the Failure of Integrative Processes in "A Painful Case"." Ed. Harold Bloom. *James Joyce's Dubliners*. New York: Chelsea House Publishers, 1988: 89-96.
- Yun, Hee-Whan. "An 'Outcast from Life's Feast': Mr. Duffy's Solipsism." 『江南大學校論文集』第37輯，(2001)：1-13.
- Vickery, Roy. *A Dictionary of Plant-Lore*. Oxford University Press, 1995. ロイ・ヴィカリー『イギリス植物民俗事典』奥本裕昭訳，八坂書房，2001年。
- 今田拓ほか「杖について」『総合リハビリテーション』7(1)(1979)：43-75.
- クリバンスキー，レイモンド，アーウィン・パノフスキー，フリッツ・ザクスル『土星とメランコリー——自然哲学，宗教，芸術の歴史における研究』田中英道監訳，榎本武文，尾崎彰宏，加藤雅之訳，晶文社，1991年。
- ジョイス，ジェイムズ『ダブリンの市民』高松雄一訳，集英社，1999年。
- 高橋和久「近代の医者なら彼を何と呼ぶだろうか——ジョイスの「痛ましい事故」を素朴に読む」工藤昭雄編『静かなる中心——イギリス文学を読む』南雲堂，2001年，204-23.
- 高橋渡「*A Painful Case*のナラティブ構造」広島女子大学国際文化学部紀要(通号8)2000年2月，49-58.
- 高松雄一 解説「ジョイスの両義的リアリズムと『ダブリンの市民』」ジョイス『ダブリンの市民』高松雄一訳，集英社，1999年，394-419.
- 松澤正監修・松原勝美著『移動補助具——杖・松葉杖・歩行器・車椅子』金原出版，2000年。

[Abstract]

## Mr. Duffy's Paralyzed Body: His Feigned Equilibrium in a Fragmented Society and Its Contemporary Discourse in James Joyce's "A Painful Case"

Mikako AGEISHI

Mr. Duffy, the main character of James Joyce's "A Painful Case," is a sophisticated upper-middle class intellectual, who seems a very punctual person. He rejects all sorts of human contact and creeds, but lives uneasily with himself. By exploring the soul of this highly introverted bachelor, Joyce exposes an agony related to the accelerated process of fragmentation and isolation, which is a symptom of modernizing Dublin. Mr. Duffy's equilibrium derives from his pathological obsession with orderliness and his denial of all types of disorder. His willful alienation from his own body, however, leads the readers to recognize an extreme case of divided consciousness. This paper considers Mr. Duffy's paralyzed body and his feigned equilibrium in comparison with contemporary issues such as alcoholism, journalism, the railroad system and so on. Mr. Duffy's fragmented self is also reflected in the narrative structure of Joyce's text.